

紙上演説会

ノーベル物理学賞受賞

中村修二先生 講演会

「夢をかなえる力とは」

「2015年春 農二は大きく生まれ変わります」というキャッチフレーズのもと、「コース制の導入」と「総合学習の充実」を柱に平成27年度より新たな体制でスタートしました。その総合学習の一環として「著名人講演会」を実施しております。今年度はノーベル物理学賞受賞者の中村修二氏（カルフォルニア大学サンタバーバラ校教授）をお招きしました。

学年ごとに「夢をかなえる力とは」という題目で講演をしていただき、それぞれの講演を2部構成で行いました。第1部は中村先生の学生時代のご経験や研究活動についての講演会を行いました。第2部は各クラスの代表者が登壇して中村先生とのパネルディスカッションを行いました。生徒は自分の夢を考えながら、これからそれに向かってどのように進んでいくかを考える機会となりました。また、当日は多くの保護者の方にも講演会に参加していただき、盛大に開催することができました。



中村先生のお話

私の学生時代は目立たない生徒でしたので、ノーベル賞をとって「私のことを知らない」という同級生がたくさんいました。中学、高校と6年間バレーボール部に所属していましたが、一度も勝ったことがなく、全戦全敗でした。高校は進学校の普通科だったので、運動するより勉強しろという学校です。

しかし、私が辞めると部員が足りなくて試合ができなくなるので、辞めませんでした。スパルタ式の部活でした。そこで私が学んだことは「負ける度になんで勝てないんだろうと考えた」ことです。負けて、考える。この繰り返しがためになったと強く感じています。

略歴

1954年（昭和29年）愛媛県生まれ、県立大洲高等学校卒業、徳島大学工学部電子工学科卒業、同大学大学院工学研究科修士課程修了、1979年（昭和54年）徳島県阿南市の「日亜化学工業」就職、青色発光ダイオードを開発。1999年（平成11年）同社退社、翌2000年カリフォルニア大学サンタバーバラ校UCSBの材料物性工学科教授に就任。低消費電力長寿命の無極性青紫半導体の開発。2014年 高機能青色化学発光度の発見で、京都大学の赤崎勇先生、名古屋大学の天野博先生と共同でノーベル物理学賞を受賞。『夢と壁』『考える力、やり抜く力私の方法』『負けてたまるか！青色発光ダイオード開発者の言い分』『大好きなことを「仕事」にしよう』『好きなことだけやればいい』『怒りのブレイクスルー―常識に背を向けたとき「青い光」が見えてきたー』『中村修二の反骨教育論 21世紀を生き抜くために』等、著書多数。2014年、文化勲章も受章。



論理的に物事を考えるのが好きだったこともあり、好きな科目は数学と物理でした。一方で歴史のような暗記科目は大嫌いでした。当時、大学卒業時の日本人の夢は、大企業に入ることでしたが、自分自身は矛盾を感じていました。アメリカの優秀な学生は皆、ベンチャー、中小企業を目指して、自分でお金を稼ぐことが目標です。

「人間は、なぜ勉強するか」といえば、赤ちゃんは空っぽの頭で生まれてからその脳にいろいろ勉強して知識を入れていきますが、知識はある程度入れればいいと思います。その観点から考えると現状の大学受験勉強は必要ないのではないかと考えています。本当に必要なのは社会で生きる勉強です。アメリカは、幼稚園生から週に1回はプレゼンテーションの勉強をするのが一般的です。社会に出て求められる力のひとつにはプレゼンの力があります。営業の仕事であればお客さんの前でプレゼンをするように、その力を小さい頃から培うことが大切であると考えています。あとは株の取引や金融の勉強を小さい頃から学校で学んでいるので、アメリカの大学生は起業する方法を知っています。

大学卒業後は、徳島の小さい会社に就職しましたが、小さい会社で自由に研究できることが魅力的でした。入社した時に、すでに赤色LEDは開発されていたので、「そのコピーを作れ」と10年間研究しました。その後、まだ誰も開発していない青色と緑色を研究しようと思いました。一番いい光というのは全ての色を保有している太陽光であり、これをLEDで作ろうと考えました（光の3原色の赤、青、緑があると何色でも作れるようになります）。私は、赤と緑を作って、高輝度青色発光ダイオードを開発しました。

世界で誰もできなかった開発が、徳島という田舎の小さな会社でできました。日本の大企業も何億円という費用を投資してこの開発を行っていましたが出来ませんでした。そして、35歳の時、私はアメリカで研究したいと思って、会社の創業者に相談したところ、アメリカのフロリダ大学に1年間研究をする機会を得ることができました。

人生で大事なことは、環境に関係なく、やろうと思えば何でもできるということです。田舎でもどんな大学でもいいと思います。何事に取り組むときに大切なことはハングリー精神です。自分自身は、中学と高校の6年間部活動として行っていたバレーで負け続けた経験でその大切さを感じることができました。

